

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2018～2021

課題番号：17KK0035

研究課題名（和文）クエーカーの合議形式の性質と民主制度における応用可能性

研究課題名（英文）The Nature of Quakers' Decision-Making and Its Applied Possibility to Democracy

研究代表者

中野 泰治（Nakano, Yasuharu）

同志社大学・神学部・准教授

研究者番号：80631895

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,200,000円

渡航期間： 7ヶ月

研究成果の概要（和文）：現代のクエーカーは基督教系とユニバーサリスト系に分かれる。前者は、敵への愛の精神において異質な意見に最後まで開かれることを良しとする。他方、後者は、啓蒙主義的な寛容精神のもと、異質な意見にオープンである。その点で合議に関する解釈は違えど、意思決定過程において実質的な相違は生じない。またクエーカー自身が認めるように彼らの合議形式は、20世紀初頭の社会学者M・P・フォレットの組織論と相似である。そのため、彼女の組織論を分析し、クエーカーに独自の要素、つまり沈黙の活用を考察することで、クエーカーの合議形式が、計算によるものではなく、計算不可能な領域に対する開けを考慮に入れたものであることが分かる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

クエーカーの合議形式は、現在、世俗組織でも合意形成のフレームとして利用されているが、彼らの合議は、大まかに言って、熟議民主主義の議論に沿うもので、またハーバードやMITで提唱される合意形成学の知見とも重なることが多い。しかし注目すべき点は、彼らの合議形式の特徴は、沈黙の礼拝でもあるということである。合議の過程に「沈黙（自己の否定）」を取り入れることで、自分の狭い視野から抜け出て、すべての人の言葉、また小さき声をも愛をもって聞き入れることで、全体的一致を最後まで探るわけである。多数決や議論の力によって合意が左右されるがちな現在、彼らの合議形式は、異質な声への歓待の場を提供するものとなりうる。

研究成果の概要（英文）：British Quakers since the 20th century have been largely categorized into two groups: Christian Quakers and Quaker Universalists. The former emphasized the importance of listening to different ideas and opinions to the last in business meetings, according to the model of Jesus's love toward enemies. The latter also think it significant to embrace differences under the influence of the Enlightenment or religious tolerance. However differently they understand the decision-making process, the one thing I realized is that there is almost no gap between them in terms of the attitude toward others. The second thing I discovered is that as Quakers themselves admit, a 20th century sociologist, M. P. Follett gives us a key to understand the mechanism of Quakers' decision-making. Namely, Quakers' decision-making is not a consensus based on calculation (for example, Pareto optimization), but is "Integration" (as Follett expresses) taking into consideration the incalculability of others and other.

研究分野：宗教学

キーワード：クエーカー 合議形式 敵（異質なもの）への愛 沈黙 熟議民主主義 M・P・フォレット 組織論
計算不可能性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

クエーカー（フレンド派）は、17世紀の共和政期イングランドで創設されて以来、集会の業務に関して合意形成をする際、独特の礼拝形式で行ってきた。彼らの礼拝は「沈黙の礼拝」と呼ばれ、神からの声（神からの働きかけ）に与るために自己否定（沈黙）において行われ、沈黙の内に神の声を聞いた者は、感話として神の声を他の信徒と共有する。彼らの合議は、そうした礼拝形式で行われ、多数決や討論による勝敗に合意の機会を見出すのではなく、すべての参加者の関心の表明と共有、反対者への配慮、そして高度なレベルにおける最終一致に至るまで多様な声に耳を傾け続けることから成り立っている。クエーカーの合議形式は、宗教的な枠組みを超えて、現在では一般的な世俗の組織でも活用され始めているが、その合意形成の理論的な構造については研究が待たれる状況である。なお、クエーカーの合議についての先行研究としては、イエズス会の神学者 Michael Sheeran(1983)によるものが代表的なものとして上げられるが、クエーカーの合議の形式・様式を概観し、それを合意に至ったエピソードによって補うという形で議論を行っているため、理論的分析というレベルには至っていない。そこで、本研究においては、思想的観点からのみならず、政治・社会学の最新成果を参照しながら、かつインタビューやアンケート調査による質的研究も併せて行うことにより、複合的に彼らの合議形式の性質と民主制における有用性について考察するが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、クエーカーの合議形式の性質と民主制における応用可能性について考察することである。20世紀初頭のイギリスの政治学者 A・D・リンゼイは、パトニー会議で見られたピューリタンによる討論の在り方、特にクエーカー（急進派ピューリタン）の合議形式に、つまり上で述べたような反対者に最大限に配慮した話し合い（討論）に基づく合意に英米の民主主義の源流を見た。現在民主主義の危機が叫ばれており、様々な民主主義の在り方が議論されているが、本研究では、歴史において最初の形として現れ、360年に亘って引き続き行われている民主主義の一形態、つまりクエーカーの合議の在り方を政治学的・社会学的視点から理論的に分析すると同時に、合議参加者へのインタビューやアンケートを行うことで質的にも分析し、彼らの合議形式の性質について理論的に把握する。そして第二の目的として、現代の民主制度（特に英米の民主制度、そしてそれらをひな型にして作られた日本の民主制）においてこういった意義を持つのかについて考える。

3. 研究の方法

コロナ禍によるロックダウンで研究課題は変更されたが、当初の研究課題は四つであった。（1）英国のクエーカーの研究施設である Woodbrook college や米国のクエーカー系大学を訪問し、そこに収集されている会議の議事録を分析すること、（2）ロンドン年会の業務集会に一年間参加し、また集会参加者にインタビューやアンケート調査を行うことで、クエーカーの合議形式の実際について把握すること、（3）こうした研究を基盤にして、英米の民主主義の中にどのように保持され、活かされているかについて分析する。具体的には、国連の諮問機関である QUNO（クエーカー国連事務所：ニューヨークとジュネーブ）での会議録や職員のインタビュー調査で一般的な組織でクエーカーの合議形式がどのように活用され、どのような成果をもたらしているかを探ること、（4）クエーカーの合議形式が、特に長期型の調停、たとえば、紛争解決などにおける合意達成の方法として応用可能かどうかを探ることであった。

渡英直後にイギリスがロックダウンに入ったため、大学や研究施設は閉鎖され、またクエーカーの集会もオンラインへ移行した。そのため当初の研究の遂行が困難だと判断し、クエーカーの合議形式の性質について、オンラインで収集可能な文献に基づく理論的研究に課題を切り替えた。具体的には、熟議民主主義や合意形成学の観点から、クエーカーの合議形式の特徴と問題点について分析し、それがどのように非宗教的文脈で応用可能かについて考察した。また同時に、ローカルなクエーカーの集会に参加している人々にインタビューすることで、補助的な考察を加えた。

4. 研究成果

（1）**学術論文**：中野泰治「クエーカーの合議形式の特質と民主制における意義 M・P・フォレットの組織論の分析を通して」、『基督教研究』、第84-1号、2022年（accepted、6月発行予定）

内容：「これまでのクエーカーの合議形式の研究においては、合議形式の形式についての叙述と、問題がうまく解決された際のエピソードトークを添えることによって、合議形式の有用性を示すという形の論文が多かったが、そのため、それらの研究では合議の在り方を理論的・

学術的に捉えているとは言い難い面があった。クエーカーは、創設当初から信仰の体系化、神学の提示を拒み、神の自由な働きを重視するために、より一層理論的に分析の対象とすることが難しかった。しかし、研究を進めていく中で、クエーカー自身が 20 世紀初頭の経営学者・組織論学者である M・P・フォレットの説く組織論とクエーカーの合議システムが相似であるとの記述を複数見つけ、そこから、フォレットの組織論を分析することで、クエーカーの合議形式を社会学的に分析できると考え、合議形式の研究を遂行した。結果として分かったことは、フォレットの組織論は、一種のコンフリクト解決のための対話理論であり、異質な意見をより良き変化のための契機としてとらえ、対話を繰り返すことにより、話者の間に「対立」ではなく、弁証法的な形で「統合」をもたらすものであるということであった。そしてまた、現代の多くの人々が考えるのとは違って、同意が民主主義にとって根本なのではなく、専門家の知識が必要であるとしても、一般的な人々で話し合いにつづけることが大切であり、(自ら自身の万能性・全能性を信じず)多様性や差異を認め合い、そこから円環的・相互補完的に討論を通して統合していくことが民主的な在り方であるということであった。このフォレットの理論は、現代の熟議民主主義理論に沿うものであり、またまた、ハーバードや MIT で提唱される合意形成学の知見とも重なるところが多い。ところで、注目すべき点は、クエーカーの合議形式の場合は、その特徴は沈黙の礼拝でもあるということである。合議の過程に「沈黙(自己の否定)」を取り入れることで、クエーカーは、自分の狭い視野から抜け出て、すべての人の言葉、また、小さき声をも愛をもって聞き入れることで、全体の一致を最後まで探る。多数決や議論の力によって合意が左右されるがちな現在、クエーカーの合議形式は、異質な声への歓待の場を提供するものとなる可能性があることが分かった。」

(2) 学術論文：中野泰治「合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論 自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点」、『基督教研究』、第 83-1 号、2021 年：1-18 頁。

内容：「クエーカー信仰は、大きく二つ、細かくは四つのカテゴリーに分類される。現代の自由主義クエーカーの集会は、その四つのカテゴリーのうち、主に「キリスト中心主義(クリスチャン・クエーカー)」と「ユニバーサリズム(ユニバーサリスト・クエーカー)」が混在した状況にある。こうした信仰タイプの相違を反映して、彼らの業務集会についてのストーリー解釈も異なる。少数の前者のクリスチャン・クエーカーの解釈は、伝統的なクエーカーの合議形式に沿って、つまり沈黙の内に祈りを合わせて、話し合い、最後の最後まで異質な意見に開かれて(「完全」)最終一致を目指すというものである。一方、多数を占める後者の解釈は、個人によって大きく異なるため簡単には定義できないが、近代の精神の一つである「寛容」「多様性の受容」を軸に、合議の形式に沿って、議論を行っているようである。クエーカーの合議形式は、世俗の組織でも用いられるようになってきているが、同時に世俗の理論によって説明・補強されるようになっている。その一つの例が、クエーカー研究者であるジョイセリン・ダーズが主張するように、クエーカーの合議に対する U 理論(MIT のオットー・シャーマーのリーダーシップ論)の適用である。現代の自由主義クエーカーは、20 世紀初頭以来、これまでの伝統を断ち切り、ネオ・ヘーゲリズムを基盤にして、信仰の近代化を推し進めた。結果、それまでの信仰とは性質の異なる、自己から始まり大いなる自己で終わる自己充足的・自己回帰的な信仰になり、信仰の目的は自己実現になった。こうした信仰形態にまさにぴったりとはまり込むかのように、同じくネオ・ヘーゲリズム的、ニューソートの U 理論が適用され、そこから合議が行われている現実がある。U 理論は、提唱者のシャーマー自身が言うように、「自己の旅

の物語」である。すなわち、自己の成長、つまり自己意識の変容によって対人関係をうまく進めることを目的とした理論である。それは、自己の内面に沈潜し、大いなる自己とつながることで、新しい可能性を開くというものであるが、理論的観点から見れば、そもそも対話相手としての異質な他者の役割が見えづらく、自己完結した自己充足・自己回帰的な構造を持つ点で、他者との対話理論としては難点があると言える。」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中野泰治	4. 巻 83-1
2. 論文標題 合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論 自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野泰治	4. 巻 84-1
2. 論文標題 クエーカーの合議形式の特質と民主制における意義 M・P・フォレットの組織論の分析を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 イングランドの宗教革命史から見るクエーカー
3. 学会等名 普連土学園教職員研修会第一部（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 普連土生が共有するクエーカーの価値
3. 学会等名 普連土学園教職員研修会第二部（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

書評：中野泰治「小倉いずみ著『トマス・フッカーとコネチカット』、金星堂、2020年」『アメリカ文学研究』、第58号、2022年：26-32頁。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	Ben dandelion (Ben Dandelion)	バーミンガム大学・Collge of Arts and Law・哲学・神学・宗教学研究科	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------